

在宅酸素療法を受ける高齢者のセルフマネジメントと予防訪問看護の 実践と課題

朝比奈結華^{*,1)}、酒井昌子¹⁾、山村江美子¹⁾、小池武嗣¹⁾、木下幸代¹⁾

¹⁾ 聖隷クリストファー大学

【目的】

在宅酸素療法を受ける高齢者の生活の質を維持し安定した在宅生活が送れるよう訪問看護の役割は重要であるが、要支援者に看護支援を提供する介護予防訪問看護の利用はわずかに過ぎず、介護予防訪問看護の支援内容や成果については明らかにされていない。本研究の目的は、介護予防訪問看護を利用している在宅酸素療法中の高齢者への訪問看護の実践を明らかにすることである。

【方法】

対象：研究に同意の得られたA市内の3か所の訪問看護ステーションにおいて訪問看護師としての臨床が3年以上の看護師のうち、在宅酸素療法を受ける高齢者に介護予防訪問看護を提供した者とした。

調査期間：2019年9月～2019年12月

データ収集方法：インタビューガイドに基づいた半構成的面接とした。

分析方法：得られたデータから逐語録を作成し、意味、内容ごとにデータをコード化した。コードの意味内容の類似性、相違性に注目して内容を分析し、サブカテゴリー化した後、意味内容が類似するものを集め、カテゴリー化した。

倫理的配慮：聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

在宅酸素療法を受ける高齢者に介護予防訪問看護を提供した訪問看護師9名から研究協力を得ることができた。訪問看護師の経験年数は平均11年で、年代は30歳～60歳代であった。在宅酸素療法中の介護予防訪問看護利用者は、各ST1～2名であった。訪問回数の平均は3.5回/月、訪問時間の平均は45分/回であった。分析の結果、6カテゴリーと18サブカテゴリーが抽出された。

訪問看護師が行った在宅酸素療法中の高齢者への介護予防訪問看護の支援内容は、【在宅酸素療法のある生活の継続を支える支援】【周囲の支援をつなぎ本人の「できる」を支える支援】【在宅酸素療法のある生活の質を維持向上する支援】【悪化期や終末期を視野に入れた意思決定支援】を行っており、実践の成果は、【本人の望む生活の継続をもたらす介護予防訪問看護】にとらえられていた。課題としては【在宅酸素療法のある独居高齢者、非該当者のセルフマネジメントを支えるサービスの不足】を感じていた。

【考察】

在宅酸素療法を受ける高齢者への介護予防訪問看護は、疾患マネジメントによる症状の悪化予防だけでなく、生活全体をとらえて利用者のセルフケアを支え、行く末を共に考える支援が行われていることが明らかになった。また、日常生活動作の自立度が高くても、訪問看護を受け入れられる関係作りに努め、行動変化につながるような支援が行われていたと考えられる。地域包括ケアシステムのなかで、在宅療養継続困難な独居高齢者や非該当者を支える地域医療サービスの不足が実感されており、課題解決に向けて他職種との連携強化が求められる。